
シャハラザードの遺言

園絵屋その衛門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シャハラザードの遺言

【Nコード】

N6053I

【作者名】

園絵屋その衛門

【あらすじ】

千夜一夜物語の語り手シャハラザードが最後の夜を前にして自分の結婚について振り返る。

今夜、私は最後の物語を語り終える。すべて語りつくし、もう語る物語がないということは、私の命もないことを意味している。

私が国王さまのもとに嫁いできたのは、千と一日前のことだった。その日、父はいつもより早い時間に、肩をがっくりと落として家に帰ってきた。私たちには微笑みを向けていつもどおりを装っていたが、心に何か大きな悩みを抱えていることは容易に察しられ、私は詩人の言葉を引用しながら父にわけをたずねたのだ。

父は話してくれた。国王さまの命により、花嫁となる無垢なるおとめを連れていかねばならないこと。しかし、この三年というものの国王さまはそのおとめをめとることに一夜を共にしてその後殺しておしまいになるので、人々は娘を連れて逃げだしてしまい、もう都には国王さまの花嫁となるようなおとめはひとりも残っていないこと。もしおとめを連れていかなければ、父自身の命が危ういこと。

「後生ですから、お父さま、このわたくしを王さまのところに嫁がせてくださいましな」

私は父にそう言った。「ひよつとすれば命をつなぐことができるかもしれないし、でなくともイスラム教徒の娘さんたちの身代わりになり、王さまの御手からあの方たちを救ってあげる役にたつてございましょうから」

私が今夜国王さまの御床にあがれば、その夜の間に、父が妹を連れて国を出ることができると思ったのだ。それに、わたし自身としても、多少なり事情を知り意見も持っていたので、ただ殺されるつもりはなかったのだ。

三年前、国王さまは王妃さまとハレムの女奴隷、そして王宮内の男奴隷の大勢の首を刎ねられた。彼らは国王さまの留守中に姦淫の罪を犯していたことが理由だったそうだ。たぶんそれがきっかけで、

国王さまは一夜限りの妻しか求めなくなれたのだろう。

もちろん、平気で夫を裏切る妻がいることは否定しない。しかし、女の全部がそういう妻になるとは限らない。一人の男である夫をただ一心に愛する妻だっているし、夫に十分な愛がなくても罪を犯さずに生きている妻もいるのだ。そういうつつましい女たちのことを、国王さまに申し上げなければならぬ、そう私は思ったのだ。

それに、妻妾の数が多ければ多いほど、その妻妾が不義をする率が高くなることも。

親同士が決めた、見ず知らずの男との結婚。体は交えても心は通わないいだち。たくさん妻妾のなかで、自分が夫にどれほど認められているのかという不安。頑丈で高い塀の中に閉じ込められ、外に出ることも、窓から外を眺めることも禁じられる息苦しさ。情と体をもてあました末に、女は夫以外の男に心と体を委ねることになる。

正直、わたし自身はそんな結婚をしたくなかった。
ならばいつそのこと、一夜限りの花嫁のほうがまだましだと思ったのだ。

少なくとも自分が決めた、意味のある結婚であると。

「とんでもないことをいうではないか。決してそなたの身を危うくするようなことをしておくれでないぞ」

父はおろおろしながら私の手にすがった。

「わたくしぜひともそうしていただきますわ」

と、私は言い張った。

すると父は私の手を離し、しばらく額にしわを寄せて考えていたが、やがて落ち着いたまなざしで私を見て、諭すようにこう言った。
「わしは、ただそなたの身に、あの驢馬と牡牛とがある農夫との間に起こしたようなことが起こらなければよいがと心配しているのだよ」

物語好きな私を諭そうとして父はそう言い、私は思わず「驢馬と牡牛とに、いったい何が起こりましたの、お父さま」とたずねた。

父は、賢しげに余計な助言をしたばかりにひどい目にあう驢馬の話をした。それから「わたしだって、おまえにその商人が妻に對してしたようなことをするかもしれないよ」と、夫が死んでもわがままを通そうとした妻を、夫がひどくたたきのめして従わせるという結末も話した。

父の話を聞くうちに、私の頭の中でひとつの計画がひらめいた。

「でもやっぱりわたくしは、ああさして頂きますわ」

父にそう言い、私は、最初は逃がそうと思っていた妹を呼んで計画をうちあげ、協力を頼んだ。もし私が失敗したら、次の花嫁は妹になる危険はあったのだが、この役を任せられるのは妹のほかはいなかったのだ。

そして、私は壮麗に身支度を整えて王宮に嫁いだ。

床入りのときに、私は涙にくれてうち沈んだ。国王さまは人の心を失われているわけではなく、私にそのわけをたずね、私が妹に別れを告げたいと申したら呼びにやってくださった。

私と妹は決死の覚悟の抱擁をかわし、妹は床の下手に座り、私は国王さまに抱かれた。

そのあと、ともに座つてよもやまの話となるのだが、妹は機を逃さず

「お姉さま、ぜひにもものお願いでございますが、なにか面白いお話をなすってくださいませ。この夜のねむれぬ間が短うなりましようほどに」と言つた。私は穏やかに、

「この教養高くいらせられます王さまがお許しくださいますなら、喜び勇んでいたしますわ」

と言つて、国王さまの返事を待った。

国王さまがお言葉を発せられるまではとても長い時間待ったような気がしたが、実はすぐにお許しが得られ、私は『商人と魔王との物語』を話した。長老たち三人が、おもしろい話と引き換えに、魔王の殺そうとする商人の血三分の一ずつを貰い受ける約束をして話をする物語である。これを話すことで、私は、国王さまに自分の命

乞いをしていることを正直に申し上げたのだ。物語はそれを選んだ者の？言いたいこと？を伝えるものなのだ。そして選び手の隠れた内心をも。

最初、国王さまは妹のおつきあいで聞いているようなご様子だったが、話がすすむにつれ、だんだん話に引き込まれておいでのようだった。夜が明けそめてきたことに気づいて私が話をやめると、残念そうなため息をひとつもらされ、私も妹も心の中で歓喜したのだ。「まあ、お姉さまのお話って素晴らしいのね。ほんとに楽しくって、気がきいていて、魅力的ですわ」と妹は国王さまのご様子などまったく気付かぬそぶりで私に話しかけた。そう、この妹だからこそ、この役目を任せることができるのだ。

「こんなの、つぎの晩に話してあげるのにくらべたらなんでもないわ」と私は妹に言った。「でも、もしかわたくしが生き延び、王さまがわたしをこの世に置いて下さったときのことなんですけど」

国王さまはそれについて何もおっしゃらなかったが、私を手にかけられることもなく、日が昇ると表にお出になられた。父が白い屍衣を持って待っているはずだが、国王さまがなんとおっしゃっているのか、私にはわからなかった。

『商人と魔物の物語』が終わったのは三夜目のことだった。

語り終えた私はすぐさま「でも、このお話も、あの漁夫のお話にくらべましたなら、面白さにおいてもものの数ではございませぬ」とうそぶいてみせた。

すると、国王さまが妹よりも早く「それはどのような話なのか」とおたずねになったのだ。そのとき、どんなに自分が嬉しかったか、どんなに喜び勇んで物語を語ったか、私はまるできのこのことのようによく覚えている。

国王さまは最高の聞き手であられた。滑稽には笑われ、悲哀には涙され、不条理には眉を寄せられ、悪行には憤怒をお顔に表された。それでいて不用意な言葉を発して物語の流れを止めるようなことなどはまったくなさらなかった。

最高の聞き手に物語を聞かせることが、語り手にはどんなに幸せな
ことか。

百日以上経った夜のこと。『聖者と鳩との物語』を語り終えたとき、
国王さまがふいに次のように言われた。

「これシャハラザード、そなたはわたしに王位などは空しきものよ
と思わせ、またあまたの女人や娘子どもの命を奪ったことを悔いさ
せたのう！」

あまりにも突然の、でも待ち望んでいた結果で、でもお言葉がい
ただけとは思っていなかったので、私はお返事ができなかった。
しかし国王さまは「ところでなにか鳥どもの物語を知っているかな
？」と続けられたので、結果としてお返事しないことがよかったの
だと思う。わたしは「存じております」と言つて、『水禽とカメ
との物語』を語った。

また、ある夜のこと、

「のう、シャハラザードや、アッラーにかけて申すが、げに結構な
話じゃったのう！」

ところで、なにか美しい友情の物語、逆境にあつても心変わりせ
ず、ために滅亡から救われるというようなのは存じてはいまいか、
どうじゃ？」

と所望されたこともあり、

「まことにそなたはのう、シャハラザード、わしがこれまでに気づ
かずにいた、さまざまなことどもについて心の眼をひらいてくれた
わい。さ、そのようなたとえ話をもつとしてはくれまいか」

とおっしゃったこともあった。

それで、国王さまのお心が前とは変られてきたのに気づかされた
のだが、私は「国王さまがわたくしをこの世にお残し下さいました
ならば」と答えた。厭味のつもりではなく、もうそれが習慣になっ
てしまっていたからである。その習慣を破るのが私からであつては、
国王さまに対して不遜であると思つたからだつた。

私は嫁ぐ前まで、いろいろな書物、年代記・昔の諸王の伝記・過

去の諸民族の物語を、父にさえもあきれられるくらい読んでいた。実家にある史書や詩集など、たぶん一千部はあると思う。私はそのすべてを国王さまに語った。

この間、私は三回妊娠した。三人とも男の子で無事に生まれ、元気に育っている。出産は国王さまがおられないときで、国王さまが来られる夜には、子どもたちは乳母とともに、王宮内の別の建物で過ごすようにしていた。

国王さまに隠さなければならぬ理由はない。しかし、わざわざお知らせするべきなのかどうか、私は妹や宦官たちと何度も話し合った。三人の子が国王さまの御子であることは確実なのだが、でもやはり、私が物語をすべて語り終えるまでは公表を控えたほうがよいだろうということになったのだ。もし国王さまが何かお気付きになり、たずねられた場合には正直に答えることにしても。

そうして、とうとう最後の『靴直しマアルーフとその妻ファアティマの物語』を語るときがやって来た。？糞？と呼ばれるほどの悪妻ファアティマから逃れてある国の王となる夫マアルーフの話である。そして、そのしばらく後に夫を追ってきたファアティマは、その犯した悪行のために殺されてしまう。

この物語のなかに、ファアティマとは対照的に描かれるマアルーフの妻の？姫？が登場する。賢く、意志が固い女性で、夫のマアルーフのためなら王である父もだますほど愛にけなげな女性である。

ファアティマが先の王妃さまで、姫が私だと口に出して言うつもりはない。だが、物語はそれを選んだ者の言いたいことも、その隠れた内心をも、聞き手に伝えるものなのだ。

そして、とうとう結末を語り、すべてを終わらせる夜が来てしまった。

物語を終えた私は、物語でない本当のことを語らなければならない。そしてその結末はどうなるかわからない。

私の額に書かれている運命は、私は読むことができないのだ。

それでも、私の結婚は幸せだったと言い切れる。ただひとりの夫に

ただひとりの妻としていられて、三人もの息子に恵まれたのだから。国王さまが私をどう思われているかは私にはわからないが、私は国王さまを尊敬し、お慕いしていることは確かなのだから。

せめて息子たちがひとり立ちできるまでは生きていたいと願っているが、どうなっても運命として受け入れる覚悟はしている。

よって死なき永劫の生者、神を讃えまつらん。その御手にこそ大権があり、宇宙の手綱を御し給う。

了

(後書き)

参考文献

「アラビアン・ナイト」1～18 別巻

前嶋信次・池田修 訳 平凡社 東洋文庫

ペルシア王宮物語 ハレムに育った王女

タージ・アッサルタネ著 平凡社 東洋文庫

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6053i/>

シャハラザードの遺言

2010年10月11日13時01分発行